

日本古代における武官の武芸～弓射の位置付けから考える～

お茶の水女子大学 D3 染井千佳

弓は古くから世界各地で使用されてきた。その使用目的は実戦のみならず、呪的な要素をも含んでいたが、地域・文化によって位置付けが異なる。西洋、特に中世ヨーロッパのキリスト教を信仰する騎士身分において、弓は残酷な兵器と位置付けられていた。一方、日本を含む東アジア地域では貴族層の教養のひとつに数えられていた。また弓を射ることで魔除けになるという呪的な側面も持ち合わせていた。

古代の日本は中国古代王朝の影響を受け、年中行事には弓を射る儀式がいくつも見られる。奈良時代において、弓を射る年中行事（弓射儀礼）には正月の射礼と五月五日節会の騎射があり、特に射礼は親王以下初位以上が弓射を天皇に奉る（奉射）ことで、服属を示す儀式でもあった。また律令制下にあつて、軍団兵士には「弓馬」が得意であることが求められていた。

摂関期には弓射儀礼として射礼に加え、賭射・弓場始が加わった。武官は六衛府制度に変わり、近衛府の下級武官が出世する際には「よく弓を射ること（能射）」が評価対象となり、近衛府武官の資質に弓射が重視された。

院政期になると、武官への評価が個人の武芸よりもその主人（本主）への評価へと重心を移す。無論、武官の資質から弓射技術が無くなるわけではないが、院政による社会情勢の変化もあり、武官の評価基準としては重視されにくくなる。では院政期以降、日本において弓射の位置付けは低下するのだろうか。

十世紀における地方動乱の中で、武士が台頭する。武士の武芸として重視されたのは「弓馬之道」である。このことから、武官の評価基準としては史料に現れにくくなる弓射技能が、新しく勃興した武士身分の評価基準に受けつがれたことが言えるのであり、日本における弓射の位置付けが低下したとは言えないのである。